

よって、泉田をうち立つ。

行き向ふの輩、足利上総前司（義兼）・小山五郎（宗政）・同七郎・葛西三郎（清重）・関四郎（俊平）・小野寺太郎（道綱）・中條義勝・橋・同子息藤次（家長）以下、雲霞のごとし。

こと昏黒に及べども一の迫（はざま）を越ゆるに能はず、途中の民居に止宿す。この間、兼任早く過ぎをはんぬ。よって、今日千葉新介（胤正）等馳せ加わり襲い到り、栗原一の迫に相逢うて挑み戦ふ。賊徒分散するの間、追奔するの所、兼任なほ五百余騎を率し、平泉・衣河を前に当てて陣を張り、栗原に差し向ひ、衣河を越えて合戦す。凶賊北上河を渡りて逃亡しをわんぬ。返し合はすの輩においては、ことごとくこれを討ち取り、次第に跡を追ふ。しかうして、外ヶ濱（青森市付近）と糠の部（青森県上北郡）の間に於て、多宇末井（たうまい）の梯（かけはし）あり、件の山を以て城郭と為し、兼任引き籠もるの由風聞あり。

上総前司（足利義兼）等又其の所に駆せ付く、兼任は一旦防戦せしといえども、終に敗北し、其の身は逐電して跡をくらます。郎従等、或は梟首或は帰降す。

この戦いで、大河兼任は衣川に陣を構え、栗原郡で戦いました。結果は壊滅的大敗北を喫しております。

一時は衣川で防ごうとしましたがすでに残兵は500人ばかりに減っております。ここでも兼任軍は敗れました。

北上川を渡って北へ逃げていきます。大河兼任ははるか北糠部・外が浜まで逃げました。

そして、多宇末井（とうまい＝兜味）山（青森市の東側？）に籠もります。足利義兼の軍はこれも破ります。

（吾妻鏡）

文治六年三月十日、大河次郎兼任、従軍においてはことごとく誅戮せらるるの後、ひとり進退に迫り、花山（けせん）

・千福・山本等を歴（へ）て、亀山を越え、栗原寺に出づ。ここに兼任、錦の脛木（はばき）を著（つ）け、金作りの太刀を帯（は）くの間、樵夫等怪しみをなし、数十人これを相囲み、斧をもって兼任を討ち殺すの後、事の由を胤正（千葉）以下に告ぐ。よってその首を実検すと云々。

最後は、逃げ回って栗原郡（？）の栗原（りつげん）寺で樵夫にあやまれて、斬殺されております。大河兼任の主家の仇討ちを計った戦いは夢と消え去りました。一族郎党の大部分が八郎湯に沈んだあとも戦いを続けるのは無謀なようにおもわれますが、戦うも死・戦わざるも死であってはやむをえません。わずか二か月の戦乱でした。

（吾妻鏡）

文治六年三月廿五日、

兼任、去ぬる十日に誅せらるるの由、奥州の飛脚参じ申す。また、生虜数十人に及ぶと云々。

この戦いの結果、鎌倉幕府の奥州支配は確固としたものになりました。各地に鎌倉幕府の御家人を配置して、知行地を与えたのです。そして、この体制は豊臣秀吉の奥州仕置きまで（もしかしたら明治維新まで？）続くのです。南部家もこの時に糠部を知行地として貰い受け（異論がありますが）、奥州の大名となっていくのです。

Home Page「都母の国」北東北の歴史さんぽ

おおかわさく【真坂大川作】

沢地名は、地形や地質に関係のあるのが多い。（中略）割のつく沢地名（割石沢、割沢など）倉（大倉、赤倉など）作（大作沢、小作沢）石（青石沢、平石沢など）畑（畑沢など）水（冷水沢、水谷沢など）である。これらの沢地名は、崩壊や